

前向きに生きていく秘訣

梶中学校 三年 月野 結愛

人間、生きていく上で、「嫌いな人、苦手な人」は必ずいるはずで、多くの人がその人を避けたり、関わらないようにしたり、あるいは嫌味を言ったりします。でもそれは、その人の「黒い部分」だけで判断し、その部分しか見ないようにしてしまっているからです。

「カラフル」という小説は、前世である過ちを犯した魂が人生の再挑戦として、自らの命をおろそかにした少年、小林真に乗り移るお話。小林真としてもう一度日常を過ごす中で、その魂が犯した過ちを思い出さなければならぬという物語です。真は、家族や友達の黒い部分ばかり見て、一人で苦しみ、自らの命をたつ選択をしました。しかし、魂が乗り移ったあとの真は、自分の周りの人達の本当の姿を知り、次第に打ち解けていきます。

私には真のこの言葉がとても心に響きました。「黒だと思っていたものが白だった。なんて単純なことではなく、たった一色だと思っていたものがよく見るとじつにいろんな色を秘めていた、という感じに近いかもしれない。」私はこの言葉を聞いて、私の家族・友達のことを思い出しました。私の妹は、私の

真似ばかりするかわいらしい色もありますが、時にみんなの前に立って話をしたり、みんなをまとめたりするかわいらしい色も持っています。母は私のことを心から愛してくれる素敵な色も、私の相談相手になってくれるあたたかい色も持っています。私の友達には、落ちこんでいたら励ましてくれる明るい色を持っている子もいれば、時に嫌なことを言ってくる黒い色を持った子もいます。きっと、本の中の真は、お母さんやお兄ちゃん、友達の黒い色を見つけた途端、その人の全てが黒だと決めつけ、一人で悩み、苦しんだのだと思います。しかし、それは違うと私は思います。その「黒色」は、その人が何個も、何十個も持っている中のたった一色。人間は実はみんなカラフル。誰かの黒も、別の人が見たら白かもしれない。だからこそ、その人が嫌なことを言ったり、許されないことをしてしまう黒い部分はその人の持つ一色にすぎないのであって、それ以外のいろんな色を知ることが、これから先生生きていく上で大切なことなんだと思います。

真の言葉でもう一つ心に響いたものがあります。「この世があまりにもカラフルだから、ぼくらはいつも迷っている。」という言葉です。真は私達と同じ十五歳の中学三年生です。

友達関係や高校のことで、たくさん悩んだ真と同じように、私も中学生になってから友達関係でたくさん悩みました。一年生のときにできた、学校で一緒にいたり放課後遊んだりする友達。その子といるとたくさん笑えて、本当に幸せでした。しかし、仲良くなればなるほどその子の色んな色が見えてきます。それはもちろん良い色だけではなくありません。私はたった一色の黒を見つけた途端、その子といるのが苦しくなりました。私は、真と同じように相手の黒い部分ばかりを見るようになり、勝手に一人で悩んでしまいました。しかし私には真と違うところが一つだけありました。それは、「相談できる相手がいる」ということでした。そのたった一つのことには、私はとても救われました。そもそも、真が見ていた「黒色」は本当に「黒色」だったのでしようか。私が見つけたその子の「黒色」は本当に「黒色」だったのでしようか。真や私が見た黒は、その相手にとって精一杯の「白色」だったのかもしれない。色は、見る人によって変わってしまいます。だから、いろんな人にもその色を見え方を聞き、深め、自分の見え方、価値観も深めていく、それこそがカラフルな世の中を迷わず生きる秘訣だと思います。

世界人口は今年中に八〇億人を突破すると
言われています。しかし、これだけの人数が
いても自分と同じ個性、全く同じ色を持って
いる人はいません。自分にしか出せない、そ
んな素敵な色を持っているのに黒ばかりにと
らわれているのは勿体ないです。黒い部分だ
けで判断せず、一歩下がって、もっといろん
な色に目を向けてみるべきです。それでも主
人公の真が言うように、このカラフルな世の
中に迷うこともあると思います。そんなとき
はいろんな人に相談し、見え方を聞くことで、
新しい色が見つかるかもしれません。自分の
見え方、考え方も深まるはずですよ。

たくさん悩んで、相談して、考えても、そ
れでも迷ってしまうことがあるかもしれませ
ん。そのときは、迷っていいのです。それほ
どに迷ってしまうこのカラフルな世の中を存
分に楽しむこと、それこそが、これから先前
向きに生きていく秘訣なんだと思いました。

私の生き方

さつき学園 九年 笠井 璃音

「人間ってばかだなあ」これが、私がこの本を読んだ直後の感想だ。なぜなら、みためや考え方が違うだけで相手に対して偏見を作りあげてしまうからだ。例えば、黒人差別。

「肌の色が違う」それだけの理由で昔から差別している。他にも、性の多様性についても多数派の常識を押し付けている社会の現状がある。「十人十色」や、「みんな違ってみんな良い」という言葉があるにも関わらず、社会には今も、偏見、常識がこんなにもあたりまえに横たわっている。

この作品の主人公は、日本人とロシア人の両親をもつミハイル。幼いころ、同級生にハーフだということをからかわれ、相手に怪我をさせてしまう。そんなときに担任の先生から言われた「いいか、ミハイル。おまえはどうしても、人一倍目立って注目される。けれどその分、悪いことをしたら人一倍後ろ指をさされるんだ。だからお前は後ろ指をさされるようなことをしたらダメなんだぞ！」という言葉がとても衝撃的だった。このときから自分はみんなと違うから、なるべく目立たないようにしてきた。もう一人の主人公がアメリカと日本のルーツを持つ少女、葉奈。葉奈

はミハイルと正反対で、周りと違うことを全く気にせず、そういった常識や偏見に囚われず、物事の「本質」をみる。

正直、私はミハイルのことが気に入らない。なぜならば、私は、他人の目を気にする理由が分からないし、思っていることも言えないのは、息がつまるからだ。

私はミハイルはなぜこのような考えをするのか、もう一度読みながら考えてみた。

私は、ミハイル自身の中に偏見があるのではないか、と考えた。無意識に「常識」に流され、差別する心がミハイル自身の中にあるのではないだろうか。自分自身を傷つける偏見が、自分の中に生まれ、苦しんでいるのではないかと、考えた。

私自身、普段は強がっているが、人間関係に臆病なところがある。それを何となく「いけないこと」のように感じ、友達をつくることに興味のないフリをして、強がってきた。今思えば、常識にとらわれ、自身の個性を否定してきた。つまり、自分自身を差別してきたとも言える。こうして考えていくと、私とミハイルは似ているのではないかと、感じてきた。そして、私とミハイルの共通点「自身を差別してしまうこと」、これはみな多かれ少なかれ持っているそのものではないか。と

考えるようになった。

人はみんな弱くて、その弱さは「多数」を「常識」とし、偏見を生む。小数のものを排除しようとする偏見や差別が生まれる。偏見が人の弱さだとすると、これを壊すには、「弱さ」にうちかつ「強さ」が必要だ。私は、この「強さ」とは、人が学び、本質を考えることだと思う。すると、そこには「想い」が生まれ、それが「行動」につながる。この作品でも、なるべく目立たないようにしていたミハイルが葉奈と関わることで、自分と向き合い、自身を差別していた自分を変えることができたのだ。自身の弱さを認め、強くなるために、学び、知る。想いが生まれ、行動することのできる人にミハイルは成長した。初めは、「人間ってばかだなあ」と思っていたが、ここまで書いてきて「人間って強いな」と思うようになった。

「常識」、私の嫌いな言葉だ。「常識的に考えて」大人がこんな言葉をよく遣うが、その常識が間違っているとは考えないのだろうか。私は、常識よりも大切なものはたくさんあると思う。人の在り方や、人生は、常識によって左右されるものではないと、ミハイルとの出会いから、強く思うようになった。

私は、葉奈とミハイルの「出会いの中で変

化し、成長する」生き方が好きだ。これからの社会をよくする生き方だと思う。二人の生き方は、生きづらさを抱える全ての人を救う生き方だ。二人との出会いを通して、いつしか、私もその一員になりたいと思うようになった。

私は、現状に流されずに、ありのままに、そしてよりよく生きようとする人でありたい。その生き方で少しでも「誰か」の支えになれたらいいなと思う。